

週日の説教

金 大烈 神父 2009年10月24日(土)

《神様が待っていてくださるのは、死ぬ時まで》

今日の福音(ルカ 13・19)を読みますと、イエス様からの厳しい話が紹介されています。そして最後に、いちじくの木のとえが話されています。

いちじくの木を植えた人が、実をつけているかどうか見に行きますが、3年経っても1度も実ったことがありません。そこで、管理をしている園丁に、「3年間見てきたけれど全く実をつけないから、切り倒しなさい。」と命令をします。命令を聞いた園丁は、「一年間待ってください。周りを掘って肥料を入れ、心をこめて手入れをしてみます。それでも実を結ばなければ、その時に倒してください。」と言いますね。

この言葉の園丁は誰でしょうか。イエス・キリストですね。神様はこの世を作り、人間に自由を与えました。神様が創造した目的にあわせて、自由に幸せに生きて欲しいと思い、それぞれの人間に息を吹きかけたのです。しかし人間は、自分の家族でさえ殺しあい、欲望に従って生きるようになります。結局神様は、ご自分が一番愛していらっしゃる、一人子のイエス・キリストを生贄として捧げました。そしてイエス様は、自分の人生を通して全ての人々に訴えました。「あなた方が正しいと思っている道は間違っている。あなた方がイメージしている神様は、そういう方ではない。」と。そして、どうすれば正しい道を歩めるか、言葉と態度と心によって全て見せました。

今日の福音のいちじくの木のとえは、「私は、この民、このいちじくの木のために命をかけます。それでも反応がなければ、その時はみ旨に任せます。」というイエス様の話ですよ。

さあ、皆様のイメージとして、神様は待っていてくださる方ですよ。それは確かなことです。悪人も善人も、全部待っていてくださいます。しかし、待っていてくださる時間に終わりが無いとは言えません。神様は、いつまで待っていてくださるのでしょうか。簡単に言えば、待ってくださるのは、私たちが死ぬ時までです。死ぬ時までには、神様を殺そうとしている者でも待っていてくださいます。なぜならば、この世は永遠という時間に比べると、あっという間に過ぎてしまう時間にすぎないからです。それなのに、この過ぎてしまう人生を自分の欲によって無駄にしてしまう人々がたくさんいます。彼らは、「どんなことをしても赦される。だから、人から遣られるより自分から遣るほうがよい。」と言って、自分の欲に従った生き方をします。しかし、それが赦されるのは死ぬ時までです。

皆様、過去を振り返ってみるとものすごく短いでしょう。やっと20歳になって何でもできるようになったと思ったら、あっという間に40年、50年、60年が過ぎてしまっています。

さあ、今日の福音を通してもう一回考えてみましょう。これはものすごく基本的なのにすぐ忘れてしまうことです。

『イエス様は、待ってくださいます。神様は待ってくださいます。しかし、それは死ぬ時までです。』

ありがとうございました。